幕末維新期の知識人にうたわれたローマ帝国

杉下　元明

一

嘉永五年（一八五二）に亡くなった斎藤竹堂に「外国詠史」[1]という漢詩があることは、富士川英郎『江戸後期の詩人たち』[2]や、中村真一郎『頼山陽とその時代』[3]『江戸漢詩』[4]にも引用され、よく知られている。ノアの洪水からアメリカ独立にいたる西洋の歴史を三十首の絶句に詠んだ連作で、停雲会による注解もそなわっている。[5]たとえばノアの洪水について詠んだ詩（第二首）はかくの如し。

怪風連月雨漫天　怪風連月　雨　天に漫たり
大地山河水渺然　大地山河　水渺然
疎導恨無神禹術　疎導恨むらくは神禹の術無く
苦心只製匣如船　苦心して只だ製す　匣　船の如きを

何ヶ月もあやしい風が吹いて雨が空一面に降り、大地も山河も水があふれる。
夏の禹王は水をおさめるのに功績があったというが、このときにはそうしたすべもなく、ただ苦心して箱舟をつくっただ

けであった。

自注がある。「諾厄、生まれながらにして聖徳有り。予め洪水の患を知る。匣を製して大いさ船の如し。妻子僕従を携へ之に入る。既にして猛雨四旬、全地皆な没す。匣、亜爾墨泥亜に漂到して止む。諾厄、匣を出で、国を開く。是れ西洋諸国の祖為り」（原漢文。以下同様）。四十日間、雨が降りつづき、箱舟に乗った以外のすべての生き物が水に飲まれてほろんだという逸話は、今日の我が国では『旧約聖書』によって広く知られるところである。

ちなみに竹堂にはまた、西洋の歴史を漢文でしるした『蕃史』という著書がある。『蕃史』の「諾厄（ノアク）」に関するくだりを書き下して掲げよう[6]。なお「鸕鷀草葺不合尊」は、ウガヤフキアヘズノミコト。神武天皇の父にして、山幸彦の息子である。

羅墨吉斯（ラメキス）の子なり。（略）是れ第二世界為り。又た新世界と曰ふ。洪水、害を為す、凡そ百五十餘日、実に千六百五十七年に在り（皇国鸕鷀草葺不合尊、漢土帝嚳八年）。諾厄、三子有り。長は雅別多（ヤヘッタ）と曰ひ、次を設模（セム）と曰ひ、三を暹模と曰ふ。皆な聖徳有り。各々西洋諸国の祖為り。

この洪水のように神話を詠んだ漢詩は比較的解し易いのであるが、詩によっては竹堂の誤解によったのではないかと疑われる作品もある。それがよくあらわれているのが、ローマ帝国を詠んだ次の詩（第八首）である。

収蔵万巻棟全充　収蔵万巻　棟全て充つ
秘閣営成洛邑中　秘閣営成る　洛邑の中
勝算只応胸裏決　勝算は只だ応に胸裏に決すべし
笑他咄咄更書空　笑ふ　他の咄咄として更に空に書するを

「邏馬中興主、公斯旦低諾波児城を築き、東城と曰ふ。旧府を名づけて、西都と曰ふ。主、文学を尚び、書閣を東都に建つ。蔵書二十万冊、嘗て出戦し十字を空中に見る。蓋し必勝を示すの語なり。既にして果たして捷つ」と自注がある。すなわち、コンスタンチノープルを東の都（西の都はローマ）とした、四世紀のローマ皇帝コンスタンティヌス一世を詠んだものと知られる。

後半がもとづいている逸話は次の如し。エウセビオス『Vita Constantini I』から引用する。

皇帝が語ったところによると、昼間の既に日が傾いた頃、彼は天高く太陽の上に光り輝いている十字架の勝利の証しを、かつ、「汝これにて勝て」という文字が付いているのを、自らの眼で見た。（略）そこで彼はそれについて、この不思議な現象は一体何なのだろうと思い惑った。彼が熟考し、いろいろ思い巡らすうちに、夜が訪れた。すると就寝中の彼のもとに神の子キリストが、天に現れたあのしるしを持って現れ、天に現れたしるしの模像を作り、それを敵との対戦のための守護として用いよと勧めた。(7)

いっぽう「咄咄として…」は、『世説新語』に見える次の故事による。

殷中事廃せられて、信安に在り。終日恒に空に書いて字を作る。揚州の吏民、義を尋ねて之を逐ひ、窃に視るに、唯（ただ）咄咄怪事の四字を作るのみ。(8)

空中に十字架を見たコンスタンティヌス帝の逸話を詩に詠むにあたって竹堂が想起したのは、空中に「咄咄怪事（チェ、おかしなことだ）」の四字を作った、晋の殷浩の故事であった。

してみれば竹堂は、誤解をしていたとおぼしい。竹堂はおそらく、コンスタンティヌス帝が空中に見たものは「一〇の文字」であったと解したのだ。実際にコンスタンティヌス帝が見たのは、「十」の字であったにもかかわらず。

鎖国下、禁教下にあって「十字架」というものを見たこともなかった竹堂にとって、これは避けがたい誤解であった。

先述したように、神話の類についてはかえって誤解が生じることは少ない。また、近代史ならば、やはりここまで大きな誤解は生まれにくいであろう。(9)

さらにいえば、三十首のなかでローマ帝国を詠んだのはこの一首のみである。ナポレオン・ボナパルトを詠んだ漢詩が八首、アレクサンドロス大王を詠んだ漢詩が四首、ピョートル大帝を詠んだ漢詩が三首もあることを考えると、いかにもバランスが悪い。

今日、西洋史の逸話からよく知られたものをえらぶなら、紀元前から四世紀の東西分裂にいたるまでヨーロッパを支配したローマ帝国が（さらには分裂後も千年以上にわたってつづいた東ローマが）有力な候補になるであろう。カエサルの事跡やその死、暴君ネロ、あるいは東ローマ帝国と十字軍やオスマントルコとのせめぎあいなどが詠まれたとしても不思議ではない。それを考えると竹堂にとってはローマ帝国が、漢詩に詠みづらい題材であったということがわかる。

二

加賀の漢方医鈴木柔（したがう）が著した、『西洋三字経』という明治時代の板本（明治七年、金沢、知新堂）がある。管見に入ったのは、国立国会図書館所蔵本。

玉城要「日本における『三字経』の変容」(10)が指摘するように、本書は『幼学三字経』の形式にならって、児童に西洋の歴史のあらましを学ばせる書物である。

三字ずつに区切った百六十八の句から成るが、たとえば最初の第一～十句は次のように訓読できる（便宜上、各句に番号を附す）。

1昔西洋　2洪水有り
3人と物と　4孑遺無し
5諾尼（ノアク）なる者　6逆め此を知る
7大匣を制し　8巨艤に似たり
9家族を載せ　10遂に死を免る

すなわち『旧約聖書』にみえるノアの洪水の故事であるが、おそらく『西洋三字経』の「諾尼」は誤記であろう。第一章で触れた『外国詠史』や『蕃史』では「諾厄」と書かれていたからだ（「諾厄」は、nuò è）。ちなみに『西洋三字経』はあとのほうでも「諾尼」と書いているから、単純な誤記というよりは、こういう字をあてると誤解していた可能性が高い。

11三児有り　12国祖為り
13洪水の前　14乃ち太古

ノアには三人の子がおり、その三人が人類の祖になったという。第一章で見たように、『蕃史』にもこれに対応する記述があった。

さて『西洋三字経』でローマ帝国に触れられるのは、第三十一句から。東ローマ帝国の滅亡を詠んだ第八十四句までを、区切りながら読んでみよう。

31羅瑪王（ローマ）　32伯子の裔
33儒略斯（ジリュス）　34始めて帝と称す
35暦法を改め　36永制を立つ
37太陽暦　38是に至って成る
39諸学術　40漸く精を致す
41如徳亜（ジュデア）　42耶蘇生る

「伯子の裔」すなわちノアの息子の一人が西洋人の祖になったという説があることは、先述した。「儒略斯」はユリウス・カエサル。英語ではジュリアス・シーザーである。紀元前四四年に終身独裁官に就任し、共和政を否定した（初めて皇帝と称したのは、彼につづくアウグストゥスであるが）。また、紀元前四五年にはいわゆるユリウス暦を立てた。それを詠んだのが、第三十五～三十八句である。

「如徳亜」は、ユダヤ。すなわちイエス・キリストの誕生を詠む。

43其の明年　44元年と為す
45天主の子　46蘇して天に上る

厳密には耶蘇の生まれた年がキリスト教暦の元年のはずであるから、「其の明年」としたのは鈴木柔の誤解か。

47帝坦丁（タンチン）　48両都を築く
49二教師　50帝の瘼を治す
51天主教　52始めて孚とせらる

「坦丁」は第一章でも名の出た、コンスタンティヌス帝。三三〇年にコンスタンティノープルを帝国の都とした。またキリスト教に帰依しローマの国教とするなどの事跡があり、「大帝」と称される。「瘼」は、やむ・くるしむ。

53帝法楞（フレン）　54二児有り
55西と東と　56帝基を創む
57羅瑪を分けて　58二司為り

三九五年のローマ帝国分裂である。「法楞」は、ウァレンティニアヌス二世。この皇帝については、第三章で後述しよう。

59西帝の裔　60十一世
61意太里（イタリ）　62其れ繋しを亡す
63国分裂　64制すべからず

西ローマ帝国は四七六年に滅亡する。「十一世」のかぞえかたが判然としないが、後述するホノリウスを初代とし、（「簒奪者」と呼ばれたヨハネスらをのぞき）ウァレンティニアヌス三世が二代と考えれば、最後のロムルス・アウグストゥスまで十一代である。

65八百年　66加列（カーレル）児
67西統を襲き　68群貔を駆る
69耶馬尼（ゼルマニア）　70帝基を立つ
71羅瑪城　72教師に賜ふ

「加列児」はカール大帝。西暦八〇〇年に西ローマ帝国の帝冠をさずけられた。「耶馬尼」はゲルマニア。カロリング王朝の衰退後は、ゲルマン人の東フランク王国が皇帝の冠を受けることになる。

73千餘年　74東帝弱る
75権臣有り　76殺虐を行ふ

西ローマ帝国がほろんだのちも、千年以上にわたって東ローマ帝国は存続する。ただし内部では陰謀が相次ぎ、しばしば皇帝はクーデターによって落命した。

77意薩(イサ)なる者　78海浜に逃れ
79遂に賊を誅し　80旧号を復す

興味深いのはこのくだりである。先述した「日本における『三字経』の変容」は、次のように訳している。

イサ（イサキオス一世コムネノス？）なる人物は浜辺に逃れ、後に侵略してきた民族を討伐し、元の国名を取り戻した。

実は「意薩」は、イサキオス二世を指すとおもわれる。これについても後述しよう。

81袪古(トルコ)国　82勢日に盛んなり
83帝位に即き　84東京を陥る

「袪古」は、オスマントルコ。一四五三年に「東京」すなわちコンスタンティノープルが陥落したことによって、東ロー

マ帝国が滅亡したことが、詠まれている。

三

ローマの分裂やイサキオス帝の逃亡が『西洋三字経』で詠まれていることを、先にみた。カエサルやコンスタンティヌス大帝は今日の日本人にもよく知られているに違いないが、ウァレンティニアヌス二世やイサキオス二世については詳しくない読者も少なくあるまい。

ウァレンティニアヌスについて、斎藤竹堂の『蕃史』は次のように書いている。

三百七十五年（仁徳天皇六十五年に当たる）、帝法楞氐你亜砦斯、西洋教を復す。（東帝西帝）三百九十四年（仁徳天皇八十三年に当たる）、邏馬四十七世帝殂す。遺命して長子亜爾噶師斯（アルカシス）を東都に封じ、東帝と曰ふ。次子福那魯斯（フクナリュス）を西都に封じ、西帝と曰ふ。此れより邏馬分かれて二国為り。[11]

「法楞氐你亜砦斯」は、版本『蕃史』（明治十五年、東京、竹中邦香）では「ハレンチニアヌス」と振り仮名がある（ただし「楞」を「楞」と誤刻する）。『西洋三字経』では「法楞」と書かれていたので、良く似た当て字であるといえる。してみれば、『西洋三字経』は『蕃史』を参考にした可能性も考えられよう。直接『蕃史』によったのではないとしても、少なくとも『蕃史』を書くに際して竹堂は何か参看した書籍（おそらく漢籍）があったはずだ。それと鈴木柔の参看した書籍が共通していたという程度の関連はありそうだ。

あるいは、今日一般に東西ローマの分裂の際の皇帝は、「アルカディウス」（これが「亜爾噶師斯」であろう）と「ホノリ

ウス」（これが「福那魯斯」であろう）と表記されるが、この兄弟の父は、テオドシウス一世である。しかし『蕃史』の記述にも『西洋三字経』の記述にもテオドシウスに当たる名が見えない（特に『西洋三字経』では「法楞」の二人の子によって帝国が分割されたという、不正確な記述となっている）。この点からも、『西洋三字経』と『蕃史』の典拠には、何か共通するものがあった可能性が高い。

『西洋三字経』と『蕃史』に共通した典拠があった可能性は、イサキオスについて考察すると、さらに濃厚になる。

イサキオス（二世）について、『蕃史』には次のように書かれている。

千百八十年（高倉天皇治承四年に当たる）庵多魯吉斯（アントロキス）、母后制里那加（セリナカ）を執り罪を誣し之を海に溺れしむ。[12]（略）帝族に伊佐粛斯（イサシウス）有り。加列児臥羅多（カレルクロト）の庶孫なり。其の才有るを以ての故、魯吉斯は之を殺さんと欲す。粛斯、海浜に避くること久しくして、諸国愈々乱るるを見、遂に義兵を倡へ、際波里斯（セホリス）を取って之に拠り、檄を伝へ、魯吉斯弑逆の罪を鳴らす。

「（庵多）魯吉斯」すなわちアンドロニコス一世によって殺されそうになった「（伊佐）粛斯」が海浜にのがれ、アンドロニコス打倒のために戦ったというのである。

実はイサキウス二世をころそうとしたのはアンドロニコスではなく、その二代あとのアレクシオス三世である。現代の研究書から引用しよう。井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』[13]には次のように書かれている。

話は一一九五年にさかのぼる。この年、アンゲロス家のイサキオス二世（在位一一八五～九五）は、兄アレクシオス・アンゲロスのクーデターによって帝位を追われ、目をくり抜かれて、息子のアレクシオスとともに幽閉の身となっ

た。

アレクシオス三世（在位一一九五～一二〇三）は、弟の目をつぶしたことで安心したのか、イサキオスの息子のアレクシオスをまもなく釈放し、遠征に連れて行ったりもしていた。

脱出の機会を狙っていたアレクシオスは、隙を見つけて、遠征先の海岸から小舟を出し、沖に停まっていたピサの商船に乗り込んで、イタリアへと向った。

したがって「海浜に逃れ」たのは、厳密にはイサキオスではなく、その息子であった。[14] にもかかわらず、（アレクシオスではなく）イサキオスが海浜にのがれたという記述があることは、『西洋三字経』と『蕃史』の典拠に共通するものがあったことの、さらに有力な傍証となるであろう（「意薩」という表記が何によったかは不明であるが）。

ちなみに「日本における『三字経』の変容」にも書かれていることだが、鈴木柔の四男が鈴木大拙である。のちに世界に禅の教えをひろめることになる大拙の、国際感覚を養う第一歩になったもののひとつは、この『西洋三字経』だったのである。

四

河口寛『海外詠史百絶』（明治十年、東京、濃香楼）という詩集がある。海外の歴史を詠んだ百首の七言絶句をおさめる。第一首は亜当（アダム）と夏娃（エバ）、第二・三首は諾亜（ノア）、第四首は亜伯拉罕（アブラハム）、第五首は埃及（エヂプト）の王、第六首は的羅（トロイ）の王子、第七首は摩西（モーゼス）（モーゼ）、第八首は希臘（ギリシア）の詩人、第九首は亜里的斯（アリストテレス）（アリストテレス）、第十首は樓倫（ソロン）を詠む。第十一首がローマ初期の逸話を詠んだ詩である。

嬌柔不畏故州兵　嬌柔畏れず　故州の兵
慰藉爺爺示款誠　爺爺を慰藉し款誠を示す
莫把傾城呼彼美　傾城を把りて彼の美を呼ぶ莫れ
美人此処是長城　美人は此処　是れ長城

転・結句で、美人は城を傾けるというが、サビーニ族の娘たちは戦争を止める城となった、と詠まれている。

注記がある。「初め羅幕路（ロミュリウ）の羅馬城を築くや人民の寡きを憂ふ。而して隣国、之を賤しみ婚せず。一日、大祭を設く。隣国の士民、家を携へ来遊す。羅馬人起ち其の女を奪ひ妻と為す。其の父兄、兵を挙げ城を囲む。女居り、和解の事を問ひ遂に寝たり」（原漢文。以下同様）。この注記のように、建国当時のローマにおいて祭礼に乗じてサビーニ族の娘たちがさらわれ、ローマ人の妻とされた。しかしその後のローマ人とサビーニ族との戦争を止めたのは彼女たちであったという逸話は、一世紀に書かれたリーウィウス『ローマ建国史』などによってよく知られるところである。

第十二首は希臘の七賢人、第十三首は呂底亜（リディア）の王を詠む。

第十四首は私加烏刺（スカヲラ）を詠む。

右手雖無勇有餘　右手は勇無しと雖も餘り有り
丹心豈敢負当初　丹心豈に敢へて当初に負かん
直将壮語圧強敵　直将壮語　強敵を圧す
莫道荊軻剣術疎　道ふ莫れ　荊軻　剣術疎しと

「羅馬の共和政を為るや、復古党有り、某王の軍を引き共和党と戦ふ。共和党中、私加烏刺なる者、敵軍に潜入し、其の王に伺ふ。緋衣有りて樹に倚る者、誤りて王と為し、匕首もて之を刺す。縛られて王の前に至る。王曰く『汝宜しく羅馬城中の状を白すべし。然らずんば死有るのみ』。私加烏刺曰く『府中、壮士三百人有り。誓ひて共に天を戴かず』。王畏れ、兵

を収めて帰る」という注記がある。「某王」を刺殺しようとした私加烏刺なる人物を、秦王（始皇帝）を暗殺しようとした荊軻と比較して詠んだ詩である。

これはムーキウス・スカェウォラを指す。『ローマ建国史』第二巻によれば、ムーキウスは、王政復古をもくろむポルセウスをころそうとし、捕らえられて王の前に引き出された。そのときムーキウスは「ローマの若者中、主だつ我われ三〇〇名は誓い合い、君を狙って同じ道を歩むことにした」と宣言し、王は彼を処刑することができなかった。[15] この際にムーキウスは右手を傷つけたため、のちに「スカェウォラ（左手）」と呼ばれることになったのである。

第十五首は波斯の王英吉塞爾基（エキセルキ）、第十六首は必保加剌的斯（ヒッポカラテス）（ヒポクラテス）、第十七・十八首は歴山（アレキサンデル）王（アレクサンドロス）、第十九首は索固拉斯（サクコラス）（ソクラテス）、第二十首は「希臘古賢某」（ディオゲネスのことらしい）、第二十一首は以色列（イスレール）の太闥（ダーヒット）（イスラエルのダビデ）、第二十二首は些路門（サロモン）（ソロモン）、第二十三首は亜斉利（アッシリア）（アッシリア）の王、第二十四首は波斯（ペルシャ）の王、第二十五首は亜幾墨的斯（アーキメデス）（アルキメデス）を詠む。

第二十六・二十七首が嚯些児（セサル）と噴陛（ポンペー）（すなわちカエサルとポンペイウス）を詠んだ詩である。

名望終能建壮図　名望終に能く壮図を建て
行収宝貨入羅都　行きて宝貨を収め羅都に入る
嚯児也解鄒家訣　嚯児も也た鄒家の訣を解す
不伐人君伐独夫　人君を伐たず　独夫を伐つ

自注がある。「嚯些児・噴陛、並びて羅馬共和政を為り、獄官を断ず。嚯些児は名望有り、噴陛は之を忌む。嚯些児、噴陛を襲ひ、噴陛敗走す。嚯些児、其の宝貨を収め、噴陛を追はず。曰く、先に将無き士卒を伐ち、後に卒無き独将を伐つ、と」。三頭政治をになったカエサルとポンペイウスだが、両者は対立にいたる。二世紀に書かれたスエトニウス『ローマ皇帝伝』第一巻（国原吉之助訳。岩波文庫）によれば、ポンペイウスを敗走させたカエサルは、「今から将軍なき軍隊に向

かって進撃する。その後で引き返して今度は軍隊なき将軍に向かうつもりだ」と兵士に告げたという。[16]

「鄒家」は、鄒（現在の鄒城市）の人であった孟子を指す。武王が殷の紂王を伐ったことについて「臣にして其の君を弑す、可ならんや」と問われた孟子は「仁を賊ふ者、之を賊と謂ひ、義を賊ふ者、之を残と謂ふ。残賊の人、之を一夫と謂ふ。一夫紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かざるなり」とこたえている（『新釈漢文大系4』）。家来も連れず脱出するしかなかったポンペイウスの末路を、紂王になぞらえているのだ。

こうしてカエサルは権力を掌握し、終身の独裁官の地位を手に入れた。しかし、強力な指導者の存在を喜ばないブルータスらによってカエサルは暗殺されるにいたるのである。

料知決死在於官　料り知る　死を決するは官に在りと
騎虎勢危停亦難　騎虎の勢危ふく停るも亦た難し
宝貨貽民邦国敵　宝貨は民に貽り邦国は敵に
遺書一字一長歎　遺書一字　一長歎

これも自注を引く。「皡些児、国宰と為り、善法を立て、大利を与へ、人民悦服す。噴陛の党、議政集会の席に就き、之を弑す。皡些児の遺書に曰く、宝貨・園囿は諸を庶民に貽る。国郡は諸を叛人に貽る、と」。カエサルの遺言には、一般市民に対しては、公園としてティベリス河畔の私邸を、一人一人には三百セスラルティウスを遺贈した。またカエサルの暗殺者の中からも大勢を、万一生れたとき自分の息子のための後見人に、デキムス・ブルトゥスに至っては、次位の相続人の中に指名していた（『ローマ皇帝伝』第一巻）。

ちなみに明治初年には、実際にローマの地を踏んで漢詩をものした邦人もいた。明治六年にフランスからローマに向かった成島柳北はその一人である。柳北は三月、カエサルの暗殺について詠んでいる（『航西日乗』）。

莫問殺君忠不忠　問ふ莫れ　君を殺すの忠不忠

霜鋩一閃百図空　霜鋩一閃　百図空し
千秋遺恨誰能雪　千秋の遺恨　誰か能く雪ぐ
敗瓦残磚弔古宮　敗瓦残磚　古宮を弔ふ

この詩は「花月新誌」に掲載されたが、下書きにあたる詩も知られ、それには「武流多斯刺該撒于議事堂一事或称為義或目為賊要是千古可痛撼之事」と注記がある。[17] この注記からは、ブルータスによるカエサル（該撒）殺しが「或は称して義と為す」のようにとらえられていたことがわかる。このように帝政への道をひらこうとしたカエサルに対し、共和政をまもるべく正義感にとらわれたブルータスが立ちあがったものとしてとらえられる風潮も、明治の日本にはあったようだ。

『海外詠史百絶』のなかでも、私加烏刺が共和政をまもり王政を否定した英雄として詠まれていたことは、先に見た。明治初期の知識人には往々にして、ローマの共和政は輝かしい制度として、王政・帝政は好ましからざる制度として受けいれられていたのである。

明治十七年にシェイクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』を『自由太刀餘波鋭鋒（じゆうのたちなごりのきれあじ）』と訳したのは坪内逍遥であったが、カエサル暗殺には自由をまもるための正義があったという史観は、つとに漢詩人によって持たれ、それが逍遥の訳語をえらぶ際にも受け継がれたといえよう。

五

『海外詠史百絶』の、ローマ帝国を詠んだ詩をつづける。

第二十八首は波斯王を詠んだ詩だが、第二十九首は次のような詩である。

天道雖然均且平　天道　然く均且つ平と雖も

人間百事欠公評　人間百事　公評を欠く
古今善悪因成敗　古今善悪は成敗に因る
美徳休言博美名　美徳　言ふを休めよ　博美の名

注記がある。「蒲児徒私（フルツス）、死に臨みて曰く、徳なる者は博く美名を一にするのみ、と」。「蒲児徒私」は未詳。あるいはカエサルを殺害したブルータスであろうか。

第三十首目、耶蘇を詠んだ詩も、広い意味ではローマ帝国を詠んだ詩といえよう。

十字架頭紅血鮮　十字架頭　紅血鮮なり
蘇生匝月亦前縁　蘇生匝月　亦た前縁
当時引力知何在　当時引力　何にか在るを知る
不管飛騰去上天　管せず　飛騰去りて天に上るを

「匝月（そうげつ）」は、一ヶ月間。イエスの昇天は万有引力の法則に反しているという発想が、ふるっている。「耶蘇、十字架刑を受け、三日後に復活す。世に在ること四十日にして天に上り去る。○西人云ふ、地は引力有り、万物を引く。故に物として地に向かひて終はらざる莫しと」と注記がある。

以下、第三十四首まで、ローマを詠んだ詩がならぶ。第三十一首目は智罷列（チヘレ）（ティベリウス）を詠む。

嬬安倦政古来然　嬬安　政に倦むは古来然り
例被功臣奪大権　例に功臣に大権を奪はる
欲戮一蛇無気力　一蛇を戮せんと欲するも気力無し
一車焚焼又他年　一車焚焼するも又た他年

注記がある（■は印刷が薄く判読し難い）。「羅馬帝智罷列、厲精して治を求む。晩年、荒頽す。嘗て功臣日耳麻尼屈私（ゼルマニクス）の

子咖利屈斯（カリクス）を養ひ嗣と為す。謂ひて曰く『朕将に一蛇を遣し羅馬人民を■呑し、又た一車を遣し其の蛇を焼かんとす』」。第二代皇帝ティベリウスは晩年、政治の第一線をはなれて隠棲した。またゲルマニクスの子を自分の後継としたが、この後継者こそが悪名高いカリグラであった。『ローマ皇帝伝』第四巻に、ティベリウスの言葉が引かれている。「カリグラは私とすべての人を破滅させんがために生きている。私は今、ローマ国民のために水蛇を、世界中の人のためにパエトンを飼育しているのだ」[18]。

第三十二首は内倫（ネロン）を詠む。

豈唯武族与儒林　豈に唯だ武族と儒林のみならんや
弑逆乾坤罪障深　乾坤に弑逆し罪障深し
亡国亡家皆自取　亡国亡家　皆な自ら取る
不知魔術在其心　知らず　魔術の其の心に在るを

注記に「羅馬帝内倫、大逆無道。有名の学士・武功の将帥、皆な死刑に処す。獅子隊起ち、王を乱攻す。内倫、死に臨み書して曰く、朕は何の魔術の滅ぼす所か、と」とある。元老院議員を多数処刑するなど暴君ぶりをしめしたネロ帝が、最後は公敵呼ばわりされ（これが「乾坤に弑逆し」であろう）、自殺に追い込まれたことは有名。その死に際しての言葉は一般に「この世から、なんと素晴らしい芸能人が消えることか」（『ローマ皇帝伝』第六巻）として知られるが[19]、「藝能人が消える」が「魔術の滅ぼす所」と誤訳されたものか。かりにこのくだりが誤訳にもとづくとすれば、ラテン語から漢語へのどの段階で誤訳されたかは興味深い問題であるが、遺憾ながら明らかにし得ない。後考を俟つ。

第三十三首は安覩忍（アントニン）を詠む。

喚做活神非所誣　喚びて活神と做す　誣する所に非ず
灑民恩露四辺濡　民に恩露を灑ぎ四辺濡ほふ

卅年不作封彊計　卅年作らず　封彊の計
一将功成万骨枯　一将功成りて万骨枯るるを

結句はいうまでもなく、曹松「己亥歳」（『三体詩』）の詩句をそのまま引いたもの。

「羅馬帝安覩忍、在位二十八年。国家無事にて、史は記すべき無し。当時、活神の称有り」と注記がある。すなわち、「慈悲深いアントニウス」と呼ばれたアントニウス・ピウスであろう。ただし皇帝に在位したのは西暦一三八年から一六一年なので、「二十八年」という注に合わないのだが。

第三十四首は設布智墨曜弊列（セフチメセヘレ）（セプティミウス・セウェルス）を詠む。

宝王従来不是珍　宝王従来　是れ珍ならず
只須稼穡殖農民　只だ須らく稼穡して農民を殖すべし
設王有此公明語　設王　此の公明の語有りて
欲贈当途用事人　当途　用事の人に贈らんと欲す

起句は「宝王…」とあるが、平仄からいっても「宝玉」とすべきであろう。

「羅馬帝設布智墨曜弊列、崩に臨みて曰く『願はくは庶民、農耕に務めんことを』。又た曰く『朕は平生、物として有らざる莫し。然るに一以て我に益する無し』と」という注記がある。内戦の末に帝位についたセプティミウス帝は、「自分はすべてを経験してきたが、何も得たものはなかった」（アエリウス・スパルティアヌス「セウェルスの生涯」。南川高志訳[20]）と述懐したという。実際、セプティミウスの死後、カラカラ帝が弟をころすなどして、徐々にローマ帝国は弱体化してゆくことになる。

以上、『海外詠史百絶』のうちおよそ一割がローマ帝国に関連する漢詩であった。同じく七言絶句であった竹堂の『外国詠史』とくらべると、量は勿論、質の面でも充実した漢詩がならんでいるという印象を受ける。かつて竹堂の詩に見られた

ような、大きな誤解は見られない。もしこのような西洋史を詠んだ漢詩が、他の作者によってもつくられていったならば、さらに面白い作品が詠まれたのではないかともおもわれる。

ただし実際は、そういった作品がつくられた様子は乏しい。これらローマ帝国を詠んだ漢詩は、西洋史の知識が入ってくる十九世紀前半より前には詠まれず、そもそも漢詩を詠むという教養が失われてゆく二十世紀にはつくられなくなる。西洋の知識と漢詩の教養が交叉した、十九世紀半ばにのみ見られた現象に過ぎなかったのである。

ちなみに『海外詠史百絶』の前年に、巴来『万国史』が刊行された。その六十八章には「ロミュルス　サバイン人ヲ誘ヒテ戯劇ヲ一覧セント言ヒシカハサバイン人ハ禍害ヲ被ランコトハ毫モ疑思セス　皆正ニ嫁スヘキ少女ヲ携ヘテ其請ニ応セリ」云々と書かれており[21]、あたかも第十一首の内容に対応している（ただしこの逸話以外の、スカエウォラ、カエサル、ティベリウス、ネロ、アントニウス、セプティミウスらの故事は、『万国史』に出てこない）。

かつて『西洋三字経』が書かれた時代には、西洋史の基礎を初心者にわからせるために、漢詩文の力を借りるという心積もりがあったに違いない。しかしこの時期以後は巴来『万国史』に代表される公教育が、その役割をになってゆくのであった。

注

（1）『竹堂詩鈔』（明治二十六年、仙台、伊勢斎助）。『詩集日本漢詩17』（平成元年、東京、汲古書院）収録。なお、漢字は通行の字体に改めた（以下同様）。
（2）昭和四十一年、東京、麦書房、三四二頁。
（3）昭和四十六年、東京、中央公論社、一四九～一五一頁。
（4）昭和六十年、東京、岩波書店、二五九～二七一頁。
（5）「太平詩文」二十三号（平成十四年一月、東京、太平詩屋）～二十八号（同十五年十二月）。
（6）国立国会図書館所蔵の安政三年（一八五六）写本を底本とした。振り仮名も原文のまま（なお「暹模」は、明治十五年の版本では「シャム」と振り仮名がある）。括弧内は原文では小書きである。

（7）『西洋古代史料集　第二版』（平成十四年、東京、東京大学出版会、二三四頁）。後藤篤子訳。
（8）『新釈漢文大系78』（昭和五十三年、東京、明治書院、一〇九五頁）。
（9）たとえば、十八世紀末から十九世紀初めに活躍したナポレオンは、竹堂らから見れば近い時代の人物であるが、『外国詠史』でナポレオンのアルプス越えを詠んだ詩に「節当三伏春猶在（節は三伏に当たるも春猶ほ在り）」という表現がある。「三伏」はグレゴリオ暦の八月ごろにあたるが、実際にナポレオンがアルプスを越えたのは一八〇〇年の五月であった。おそらく竹堂は「五月」を、旧暦のそれと誤解したのであろう。
（10）静永健・川平敏文編『東アジアの短詩形文学』（平成二十四年、東京、勉誠出版、二〇〇～二一二頁）。
（11）これらの西暦の年次についてはよくわからないことが多い。「邏馬四十七世帝」はテオドシウス一世であろうが、亡くなったのは「三百九十四年」ではなく三九五年である。「三百七十五年、帝ハレンチニアヌス、西洋教を復す」についてはさらに難解で、アウグスティヌス帝の回心（三八六年）、テオドシウス帝による国教化（三九一年）などでは年次が合わない。さらにいえば「仁徳天皇」の在位も、「六十五年」は西暦三七七年、「八十三年」は三九五年とするのが今日では通例である。
（12）これは、アンドロニコスが、皇帝アレクシオス二世の母マリアをころした事件を指しているとおもわれる。ただし注11同様、『蕃史』の年次は通説（西暦一一八二年）と一致しない。なお、その後、アンドロニコスはアレクシオス二世を殺害し、正帝に即位。ところが二年で廃位され、イサキオス・アンゲロスが即位する。しかしそのイサキオスも後述するように弟によって皇位をうばわれたあげく、失明させられるのである。
（13）平成二十年、東京、講談社、二二二～二二三頁。原本は平成八年刊。
（14）こののちアレクシオスは、第四回十字軍と結託してコンスタンティノープルを攻め、イサキオスが復権することになる。したがって『西洋三字経』の「賊」は、『蕃史』のアントロキス、すなわちアレクシオス・アンゲロスを指すのであろう。
（15）鈴木一州訳『ローマ建国史（上）』（平成十九年、東京、岩波書店、一八二頁）。
（16）国原吉之助訳『ローマ皇帝伝（上）』（昭和六十一年、東京、岩波書店、四三頁）。
（17）『新日本古典文学大系明治編5』（平成二十一年、東京、岩波書店、三二八頁）。校注は日原傳。
（18）国原吉之助訳『ローマ皇帝伝（下）』（昭和六十一年、東京、岩波書店、一二頁）。なお、パエトンは太陽神ヘリオスの息子。父から火の車を借りて操縦し、誤って世界に災禍を齎したとされる。したがって「其の蛇を焼かん」というのも、ラテン語から漢語に訳される際に誤訳があったものか。
（19）注18参照。一九二頁。
（20）『ローマ皇帝群像2』（平成十八年、京都、京都大学学術出版会、一三〇頁）。
（21）明治九年、東京、文部省、三一一頁。

【キーワード】
・日本漢文学　・江戸時代　・明治時代　・西洋史　・漢詩